

海外移住とは何か ー 日系人から学ぶ ー

海外移住の歴史的意義は何か？ 移民または移住者と聞くと、出稼ぎや棄民（きみん）といった言葉を思い浮かべる方もいるかもしれませんが。暗いイメージと重なることもあります。しかし、そうした方々が果たしてきた歴史的意義を考えると、そこには重要な世界史的意味を見出すことができます。

アメリカ大陸という新世界に渡り、新しい土地で新文明の建設に参加した日本人。新文明建設に積極的に寄与した日系人は、現地社会への貢献を果たした国際交流のパイオニアでもあります。

日系人とは、海外へ移住した日本人とその子孫の方々を指し、現在ではその数も 300 万人を超えると推定されています。すでに六世も誕生し、混血化が進んでいます。日系人の中には、日系であることを強く自覚し、先祖から受け継いだ文化遺産を次世代へと伝えるべく、不断の努力を重ねている人たちがいます。現在、外国人を受け入れる立場にある日本の私たちも、日系人の歴史や経験から、異文化を受け入れ共に生きる、その知恵や術を学ぶことができるのです。



パンアメリカン日系人大会（COPANI）2005年



日系人の貢献を顕彰した壁画
クリチーバ市営市場 ブラジル

海外移住の歴史 第二次大戦まで

日本人の海外渡航は、遠く明治維新以前にさかのぼります。1866年、御免の印章という今日の旅券に相当する許可証の発行が、その端緒となりました。続いて、ハワイのサトウキビ耕地での労働に、1885年から1894年の10年間に、約2万9千人が渡りました。官約（かんやく）移民と呼ばれました。1898年ハワイがアメリカに併合されると、カリフォルニアを始めとした西海岸へも移民が渡ります。1920年までに写真花嫁と呼ばれた女性移民も2万人ほど渡りました。

1908年にはブラジルへの移住が始まり、コーヒー農場の雇用契約農として仕事に就きました。家族労働がその条件でした。1924年、排日移民法がアメリカで通過すると、移民の流れが、北米から南米へと変わります。

そして第二次世界大戦が勃発すると、アメリカやカナダでは二世を含む日系人の強制立退き・収容が行われ、日系人社会はたちまちにして崩壊します。南米においても、日本語学校が閉鎖され、日本語新聞も廃刊、日系人社会はたいへんな混乱状態に陥ります。



サトウキビ耕地の労働風景 海外移住資料館常設展示



サントス港に接岸した笠戸丸 1908年 ブラジル

海外移住の歴史 第二次大戦以後

第二次大戦後、日本が敗戦したことから、戦前に渡った日本人移民はほとんどが移住先国に残り、そこで生きていくこととなります。しかし、日本の敵対国であった移住先国では、日系人に対する偏見や差別は、簡単に消えません。そのような境遇にありながらも、日系人は日本国民に救援物資を送る運動を起こし、毛布や粉ミルクなど膨大な物資が横浜に到着しました。ララ物資（LARA）と呼ばれ、日本人の6人に1人がその恩恵を受けました。

1952年には、戦後移住が再開され、工業分野における移住も行われます。1973年には、船による移住が終わりを告げ、最後の移民船「にっぽん丸」が横浜から出航します。北米では、リドレスと呼ばれた戦時中の強制収容に対する賠償請求運動が起こり、1988年に補償法が成立します。こうして日系人はそれぞれ移住先国の一員として社会的地位を固めていき、移住後数十年の節目に周年記念祭を実施するようになります。現在では、アメリカ大陸をまたがる日系人同士の交流も盛んに行われ、日系人としてのアイデンティティの確立に寄与しています。



ララ物資記念碑 横浜港



最後の移民船 にっぽん丸の出航 1973年

日系人の生活とコミュニティ

初期移民は、アメリカではブランケ担ぎと呼ばれた移動農業労働者、ブラジルではコロノと呼ばれたコーヒー農場の雇用農業労働者として働きました。さらにペルーでは理髪店、アルゼンチンではクリーニング店など、日系人に典型的な職業がありました。カナダではサケ漁に従事する和歌山県出身移民がおおぜいいました。

とくに農業分野において、日本人移民は各国で顕著な貢献を果たし、品種改良や新品種の導入により、現地の食生活を豊かにしました。家庭では日本の習慣を大切にするとともに、日本人会が作られ、日本語学校を設立し、日本人としての教育を子孫に伝えようと努めました。県人会や婦人会の活動も活発に行われます。日本語新聞も各地で発行され、互いに情報交換しました。

小作農生活から脱すると、自作農そして商工業分野へも進出していきます。二世が成長すると大学に進み、都市部で生活するようになります。「日本人町」や「日本人街」などと呼ばれる日本人集住地域も形成されていきます。



露店市の屋台 海外移住資料館常設展示



サンフランシスコの日本町

日系人の現在と多文化共生

国や地域によって事情は異なるものの、日系社会ではすでに六世が誕生し、三世中心の時代になりつつあります。日系人としての意識が薄れ、日系コミュニティからは距離を置く日系人も増えています。このような趨勢の中、日系人としてのアイデンティティや連帯を維持するための様々な取り組みがなされています。各地で、夏祭りや盆踊り、花祭りや七夕祭り、エイサーなどが行われ、日系人以外の人たちもたくさん参加するようになってきています。若い世代の中には、**nikkei** としての意識に目覚め、独自の文化を創造しようと活動する人たちも現れています。

その一方で、日本人移住百周年記念イベントなども行われ、日本人移民に対する高い評価が各国で再認識されています。

ブラジルやアメリカなどでは混血が進み、現在では日系人口の30-40%が混血です。家族親戚の中に日本人の血統をもたない人が多数含まれており、それが当たり前になっています。血統による結び付きではなく、生活を共にし、価値を共有する者としてのニッケイ・ファミリーが生まれています。ニッケイ・ファミリーはまさに多文化共生を実現しているのです。



日本人ブラジル移住 100 周年記念式典



六世が誕生したビッグファミリー ハワイ
海外移住資料館常設展示